
「続」親がない

ODA 義経

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「続」親がいない

【Nコード】

N3249T

【作者名】

ODA 義経

【あらすじ】

「親がいない」のその後の三人を描く、続編ストーリー。

かつて、その道では有名だった、暴力団を潰した少年たちがいた。彼らは特別な組織を作り、さまざまな事件？を解決する！今回は、迷いの犬を探せ！です。

（前書き）

今回は「あれ」から三年後の三人と、七つになった妹も加えた、四人での冒険です。

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

電話がなりひびく。

ガチャッ

電話に出た。

「もしもし。はい」

電話に出たのは、七歳前後の、女の子。いま、この家には、おおくの電話が鳴り響いていた。しかしそれは、親戚からのくだらない話でもなく、知り合いの世間話でもなく、友達の遊びの誘い電話でもない。

「はい。相談したいことがあるのですが・・・」
見知らぬ人の相談の電話である。

「おい。香織。電話きたかー？」

しばらくして、あたしを呼ぶ声がする。その声は、だんだんと近づき、あたしが入っていた部屋の扉を開けた。

「あつー！お兄ちゃん」

彼の名は、和弘。あたしの兄であり、世界で一番尊敬する人。

「うん。ついさっきね。ていうか、あたしに留守番ばっかさせない

でよね！」

「あー。あー。分かってるよ」

お兄ちゃんは、あたしの書いた、メモを取る。

「こいぬさがし・・・〇〇く、3ちようめ・・・」

彼は、あたしの書いたメモを、つぶやく。

「つていうか、『子』と『犬』ぐらい漢字で書けよ!!」

そしてツツコむ。

「うるさいわね！お兄ちゃんの字は汚すぎて読めないんだからさ！」

「やかましいっ!!」

兄弟喧嘩だ。十七歳と七歳との喧嘩。いつものこと。

「おーい。今日の活動は？」

外から二人の声が聞こえた。お兄ちゃんの同級生の由希ちゃんと翔くんだ。同じく十七歳。学校も小学校から同じで、いつも仲良しかった。

「おーい。入ってこーい」

ドタドタと上がり込んでくる。そしてにぎやかになっていく。

ここは、警察庁特例の事務所。スーパーアシストセンター（SAS）。数年前。あたしの兄は、一つの悪い団体を潰したことがある。それに感動した、源駿人警部により、特別な組合を設けてもらったのだ。その日から、警視庁のお墨付きで、いろんな相談事にのっているのだ。しかし、ある依頼はほとんど、子犬を探してほしいだの・・・子猫を探してほしいだの・・・落とし物を探してほしいだの・・・そんなものばかりだ。

「よし。今日も頑張つて探すか。とりあえず、飼い主に会わないとな。いくぞ、みんな!!」

「おー!!!!」

「いえーい!!!」

三人が揃って出ていく。あたしはいつものように留守番。あたしはふと、外を見る。お兄ちゃんはこのことをして、楽しいのだろうか・・・？

何か大きな事件を解決できたら・・・それはとても楽しいだろう。でも、普段の仕事といえば、それとはとてつもなく離れている、小さなお題ばかり。それでも、お兄ちゃんは楽しいのだろうか・・・？空が少し暗くなった気がした・・・。

和弘たちは、飼い主の家に来ていた。事情確認というやつだ。

「ええーっと、昨日、晩ごはんを食べさせたんですね。で、少し熱があったので、寝込んでしまったんですね。私はいつも、夜にお散歩に行っていたんです。昨日はそんなことをできる余裕もなかったの、そのまま寝たんですよ。当然夜は吠えていたんです。でも、次の日になったら、いつの間にか、いなくなってたんです」

飼い主は事の次第を説明した。由希はメモをとり、翔はそれを見ている。和弘が続けた。

「普段の散歩の道を教えてくれませんか？」

和弘がそういうと、飼い主は立ち上がり、連れていってくと言ってもらえた。

そのルートは家からスタートし、町内を回って帰ってくるというものだった。たどりついたとき、

「どうやら、この道を通った形跡はないですね。縄張りを印したものもなかったですし・・・」

和弘はうなづいた。いったいどこにいったのか・・・？

「しかたない。一人一人聞き込んでいくしかない。すみません。その子犬の写真はありませんか？」

子犬の写真を、三人写メをとった。

「よし、三手に別れて聞いていこう。できるだけ多くの情報を探してこいよ。見つかったら、まず、飼い主さんに電話。そのあと、俺と由希に電話な！最後に見つけたやつが、香織に任務終了を教えておけよ！」

翔はとりあえず、S A Sに戻る。パソコンを立ち上げ、チャットにログインする。

S H O H

>この子犬←知ってる人いない(････)

はるは

>うーん。知らない(^|^-)

みきお

>分かんない(^o^)/

なつき

>見たことあるかも・・・

S H O H

>なつきさん。いつにどこですか？

なつき

>三日前に、交差点で飼い主さんと歩いてました(^-^)"g

S H O H

>昨日は見てませんか？

なつき

>ごめんなさい(TOT)

渡辺くん

>あっ!!昨日見た見た!!

SHOH

>どこですか?

渡辺くん

>確か・・・飼い主さんいなくて、一人で小さな林の中に入っていましたよ

SHOH

>ありがとうございました。実は、迷子の犬なんですよね。失礼します。

「もしもし。昨日、どこかの林に入っていたらしいよ。和弘!」

「おっ!さすが、情報屋。で、どの?」

「あっ!!」

「・・・もういちどお願いね」

プツッ。プー。プー。プー。

「人使いのあらいやつめ!!」

次に開いたのは、全国の地図が見れるサイト。散歩をするという、その地域を示してみた。そのすぐ近くの林を探す。

「確かここだと言ってたけど・・・」

由希と和弘の二人が集まって、林にやって来た。そう大きくはないが、大きな木が立ち並ぶ場所だ。意外と暗く、よく見ないと分からないだろう。

「よし。探すか!」

「うん。頑張ろう!」

二人は必死に目を凝らして探した。すると、

「ワン!ワン!ワン!ワン!ワン!」

犬の鳴き声が聞こえた。しかし、いた場所は・・・。

「木、木の上!?!」

猿に連れていかれたのか、自分で登ったのか、木から降りられなくなつて、助けを呼ぶように鳴いていた。和弘が登り始める。由希は、飼い主に電話していた。

「いやー本当によかつた」

「うん。飼い主さんも喜んでくれたからね」

翔くんは犬を見ることはなかったが、二人の話を聞いて、微笑みながら、パソコンをいじっていた。あたしは二人の話を笑いながら聞いていた。いつもの楽しい日常だ。あたしは、ふと、お兄ちゃんに尋ねた。

「いつもいつも、楽しそうだね。何がそんなに楽しいの?」

「あ!?!そんなの、簡単だよ!!」

みんなの笑顔さ!!!

「……」

「和弘……恥ずかしい」

「一瞬でしらけたな」

「うつせえ!!」

そうだ。あたしたちは、みんなの笑顔のために頑張ってるんだ。大きな依頼がないってことは、みんなが笑顔でいられるってことなんだ。

頭がすっきりしたあたしは、大きな声で笑った。

（後書き）

また、のちのちに続編第二段もやるかも（暇だったら）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3249t/>

「続」親がいない

2011年10月8日18時03分発行